

味  
な街

連載21

美味しいお酒と肴のお店

## 「すゞらん」

料亭、割烹、小料理屋、居酒屋などの呼称には、それぞれ厳密に一線を画す区別があるのかなと思うことがあるが、「すゞらん」はいずれの特徴をも持つ合わせた店である。間口二間余りの店に入ると、上がり框に統いて八席の和風カウンター。畳から床下に足を伸ばせる掘り炬燵式で、カップルや勤

若者で賑わうトアウエストの路地にひっそりとある「すゞらん」は、まさに穴場といった風情。左が女将の岸本カツ子さん、右が筆者

腕を揮うが、毎日東山市場で仕入れるひる網の活魚の刺身や煮つけのうまさもさることながら、此の店の名代は働く者の女将が東条湖の自宅の畠で作る野菜の料理で、そのバラエティーは多岐にわたり、小芋の煮付け、わけぎのぬた、セロリと白子乾いため、苦瓜と豆腐、ぶり大根、白菜ごまあえ等等、しづりかけるレモン、ゆずまで自家栽培という、日本酒の銘柄も豊富だが庭の花梨や疊草の強壮薬酒まで取り揃えられている。

私にとって「すゞらん」の料理は京都のお番菜を思わせる。昔から京都に何の日に何をたべるというきまりがあつて、私の実家（＊）では文政年間からの慣例で朔日には身欠鰯と刻み昆布をたき、八のつく日はあらめと揚げの煮物、十五日は小豆飯といもぼう、月末はおから。畠の番菜は焼豆腐と揚げの夫婦だきとか鮎と茄子の煮物等であつた。面倒なようだがその日はそれで済むので女は余分な気を使わずにすむし、乾魚とか豆や海草等、ヨードやミネラル、蛋白質がとれる生活の知恵と言える。お番菜の番は常のモノという意味で番茶や番傘と言うが如し。素朴な材料に手間暇かけて仕上げた伝統

め帰りの客が気軽に一杯やれる雰囲気である。奥は十人以上の宴会にも適した和室で、先斗町あたりの離れ座敷の風情もうかがえる。カウンターの奥で女将の岸本カツ子さんと次男の隆君が

腕を揮うが、毎日東山市場で仕入れる

ひる網の活魚の刺身や煮つけのうまさ

もさることながら、此の店の名代は働く者の女将が東条湖の自宅の畠で作る

野菜の料理で、そのバラエティーは多

岐にわたり、小芋の煮付け、わけぎの

ぬた、セロリと白子乾いため、苦瓜と

豆腐、ぶり大根、白菜ごまあえ等々、

しづりかけるレモン、ゆずまで自家栽培

という、日本酒の銘柄も豊富だが庭

の花梨や疊草の強壮薬酒まで取り揃え

られている。

私にとって「すゞらん」の料理は京

都のお番菜を思わせる。昔から京都に

何の日に何をたべるというきまりが

あつて、私の実家（＊）では文政年間

からの慣例で朔日には身欠鰯と刻み昆

布をたき、八のつく日はあらめと揚げ

の煮物、十五日は小豆飯といもぼう、

月末はおから。畠の番菜は焼豆腐と揚

げの夫婦だきとか鮎と茄子の煮物等で

あつた。面倒なようだがその日はそれ

で済むので女は余分な気を使わずにす

むし、乾魚とか豆や海草等、ヨードや

ミネラル、蛋白質がとれる生活の知恵

と言える。お番菜の番は常のモノとい

う意味で番茶や番傘と言うが如し。素

朴な材料に手間暇かけて仕上げた伝統

め帰りの客が気軽に一杯やれる雰囲気

である。奥は十人以上の宴会にも適し

た和室で、先斗町あたりの離れ座敷の

風情もうかがえる。カウンターの奥で

女将の岸本カツ子さんと次男の隆君が

腕を揮うが、毎日東山市場で仕入れる

ひる網の活魚の刺身や煮つけのうまさ

もさることながら、此の店の名代は働く

者の女将が東条湖の自宅の畠で作る

野菜の料理で、そのバラエティーは多

岐にわたり、小芋の煮付け、わけぎの

ぬた、セロリと白子乾いため、苦瓜と

豆腐、ぶり大根、白菜ごまあえ等々、

しづりかけるレモン、ゆずまで自家栽培

という、日本酒の銘柄も豊富だが庭

の花梨や疊草の強壮薬酒まで取り揃え

られている。

私にとって「すゞらん」の料理は京

都のお番菜を思わせる。昔から京都に

何の日に何をたべるというきまりが

あつて、私の実家（＊）では文政年間

からの慣例で朔日には身欠鰯と刻み昆

布をたき、八のつく日はあらめと揚げ

の煮物、十五日は小豆飯といもぼう、

月末はおから。畠の番菜は焼豆腐と揚

げの夫婦だきとか鮎と茄子の煮物等で

あつた。面倒なようだがその日はそれ

で済むので女は余分な気を使わずにす

むし、乾魚とか豆や海草等、ヨードや

ミネラル、蛋白質がとれる生活の知恵

と言える。お番菜の番は常のモノとい

う意味で番茶や番傘と言うが如し。素

朴な材料に手間暇かけて仕上げた伝統

め帰りの客が気軽に一杯やれる雰囲気

である。奥は十人以上の宴会にも適し

た和室で、先斗町あたりの離れ座敷の

風情もうかがえる。カウンターの奥で

女将の岸本カツ子さんと次男の隆君が

腕を揮うが、毎日東山市場で仕入れる

ひる網の活魚の刺身や煮つけのうまさ

もさることながら、此の店の名代は働く

者の女将が東条湖の自宅の畠で作る

野菜の料理で、そのバラエティーは多

岐にわたり、小芋の煮付け、わけぎの

ぬた、セロリと白子乾いため、苦瓜と

豆腐、ぶり大根、白菜ごまあえ等々、

しづりかけるレモン、ゆずまで自家栽培

という、日本酒の銘柄も豊富だが庭

の花梨や疊草の強壮薬酒まで取り揃え

られている。

私にとって「すゞらん」の料理は京

都のお番菜を思わせる。昔から京都に

何の日に何をたべるというきまりが

あつて、私の実家（＊）では文政年間

からの慣例で朔日には身欠鰯と刻み昆

布をたき、八のつく日はあらめと揚げ

の煮物、十五日は小豆飯といもぼう、

月末はおから。畠の番菜は焼豆腐と揚

げの夫婦だきとか鮎と茄子の煮物等で

あつた。面倒なようだがその日はそれ

で済むので女は余分な気を使わずにす

むし、乾魚とか豆や海草等、ヨードや

ミネラル、蛋白質がとれる生活の知恵

と言える。お番菜の番は常のモノとい

う意味で番茶や番傘と言うが如し。素

朴な材料に手間暇かけて仕上げた伝統

め帰りの客が気軽に一杯やれる雰囲気

である。奥は十人以上の宴会にも適し

た和室で、先斗町あたりの離れ座敷の

風情もうかがえる。カウンターの奥で

女将の岸本カツ子さんと次男の隆君が

腕を揮うが、毎日東山市場で仕入れる

ひる網の活魚の刺身や煮つけのうまさ

もさることながら、此の店の名代は働く

者の女将が東条湖の自宅の畠で作る

野菜の料理で、そのバラエティーは多

岐にわたり、小芋の煮付け、わけぎの

ぬた、セロリと白子乾いため、苦瓜と

豆腐、ぶり大根、白菜ごまあえ等々、

しづりかけるレモン、ゆずまで自家栽培

という、日本酒の銘柄も豊富だが庭

の花梨や疊草の強壮薬酒まで取り揃え

られている。

私にとって「すゞらん」の料理は京

都のお番菜を思わせる。昔から京都に

何の日に何をたべるというきまりが

あつて、私の実家（＊）では文政年間

からの慣例で朔日には身欠鰯と刻み昆

布をたき、八のつく日はあらめと揚げ

の煮物、十五日は小豆飯といもぼう、

月末はおから。畠の番菜は焼豆腐と揚

げの夫婦だきとか鮎と茄子の煮物等で

あつた。面倒なようだがその日はそれ

で済むので女は余分な気を使わずにす

むし、乾魚とか豆や海草等、ヨードや

ミネラル、蛋白質がとれる生活の知恵

と言える。お番菜の番は常のモノとい

う意味で番茶や番傘と言うが如し。素

朴な材料に手間暇かけて仕上げた伝統

め帰りの客が気軽に一杯やれる雰囲気

である。奥は十人以上の宴会にも適し

た和室で、先斗町あたりの離れ座敷の

風情もうかがえる。カウンターの奥で

女将の岸本カツ子さんと次男の隆君が

腕を揮うが、毎日東山市場で仕入れる

ひる網の活魚の刺身や煮つけのうまさ

もさることながら、此の店の名代は働く

者の女将が東条湖の自宅の畠で作る

野菜の料理で、そのバラエティーは多

岐にわたり、小芋の煮付け、わけぎの

ぬた、セロリと白子乾いため、苦瓜と

豆腐、ぶり大根、白菜ごまあえ等々、

しづりかけるレモン、ゆずまで自家栽培

という、日本酒の銘柄も豊富だが庭

の花梨や疊草の強壮薬酒まで取り揃え

られている。

私にとって「すゞらん」の料理は京

都のお番菜を思わせる。昔から京都に

何の日に何をたべるというきまりが

あつて、私の実家（＊）では文政年間

からの慣例で朔日には身欠鰯と刻み昆

布をたき、八のつく日はあらめと揚げ

の煮物、十五日は小豆飯といもぼう、

月末はおから。畠の番菜は焼豆腐と揚

げの夫婦だきとか鮎と茄子の煮物等で

あつた。面倒なようだがその日はそれ

で済むので女は余分な気を使わずにす

むし、乾魚とか豆や海草等、ヨードや

ミネラル、蛋白質がとれる生活の知恵

と言える。お番菜の番は常のモノとい

う意味で番茶や番傘と言うが如し。素

朴な材料に手間暇かけて仕上げた伝統

め帰りの客が気軽に一杯やれる雰囲気

である。奥は十人以上の宴会にも適し

た和室で、先斗町あたりの離れ座敷の

風情もうかがえる。カウンターの奥で

女将の岸本カツ子さんと次男の隆君が

腕を揮うが、毎日東山市場で仕入れる

ひる網の活魚の刺身や煮つけのうまさ

もさることながら、此の店の名代は働く

者の女将が東条湖の自宅の畠で作る

野菜の料理で、そのバラエティーは多

岐にわたり、小芋の煮付け、わけぎの

ぬた、セロリと白子乾いため、苦瓜と

豆腐、ぶり大根、白菜ごまあえ等々、

しづりかけるレモン、ゆずまで自家栽培

という、日本酒の銘柄も豊富だが庭

の花梨や疊草の強壮薬酒まで取り揃え

られている。

私にとって「すゞらん」の料理は京

都のお番菜を思わせる。昔から京都に

何の日に何をたべるというきまりが

あつて、私の実家（＊）では文政年間

からの慣例で朔日には身欠鰯と刻み昆

布をたき、八のつく日はあらめと揚げ

の煮物、十五日は小豆飯といもぼう、

月末はおから。畠の番菜は焼豆腐と揚

げの夫婦だきとか鮎と茄子の煮物等で

あつた。面倒なようだがその日はそれ

で済むので女は余分な気を使わずにす

むし、乾魚とか豆や海草等、ヨードや

ミネラル、蛋白質がとれる生活の知恵

と言える。お番菜の番は常のモノとい

う意味で番茶や番傘と言うが如し。素

朴な材料に手間暇かけて仕上げた伝統

め帰りの客が気軽に一杯やれる雰囲気

である。奥は十人以上の宴会にも適し

た和室で、先斗町あたりの離れ座敷の

風情もうかがえる。カウンターの奥で

女将の岸本カツ子さんと次男の隆君が

腕を揮うが、毎日東山市場で仕入れる

ひる網の活魚の刺身や煮つけのうまさ

もさることながら、此の店の名代は働く

者の女将が東条湖の自宅の畠で作る

野菜の料理で、そのバラエティーは多

岐にわたり、小芋の煮付け、わけぎの

ぬた、セロリと白子乾いため、苦瓜と

豆腐、ぶり大根、白菜ごまあえ等々、

しづりかけるレモン、ゆずまで自家栽培

という、日本酒の銘柄も豊富だが庭

の花梨や疊草の強壮薬酒まで取り揃え

られている。

私にとって「すゞらん」の料理は京

都のお番菜を思わせる。昔から京都に

何の日に何をたべるというきまりが

あつて、私の実家（＊）では文政年間

からの慣例で朔日には身欠鰯と刻み昆

布をたき、八のつく日はあらめと揚げ

の煮物、十五日は小豆飯といもぼう、

月末はおから。畠の番菜は焼豆腐と揚

げの夫婦だきとか鮎と茄子の煮物等で

あつた。面倒なようだがその日はそれ

で済むので女は余分な気を使わずにす

むし、乾魚とか豆や海草等、ヨードや

ミネラル、蛋白質がとれる生活の知恵

と言える。お番菜の番は常のモノとい

う意味で番茶や番傘と言うが如し。素

朴な材料に手間暇かけて仕上げた伝統

め帰りの客が気軽に一杯やれる雰囲気

である。奥は十人以上の宴会にも適し

た和室で、先斗町あたりの離れ座敷の

風情もうかがえる。カウンターの奥で

女将の岸本カツ子さんと次男の隆君が

腕を揮うが、毎日東山市場で仕入れる

ひる網の活魚の刺身や煮つけのうまさ

もさることながら、此の店の名代は働く

者の女将が東条湖の自宅の畠で作る

野菜の料理で、そのバラエティーは多

岐にわたり、小芋の煮付け、わけぎの

ぬた、セロリと白子乾いため、苦瓜と

博多から長崎に向かう特急「かもめ」の車内で、なかにし礼の「長崎ぶらぶら節」を読み終えた。

長崎。そのイメージは、日本三大祭りのひとつ「長崎くんち」、グラバー園、異国情緒あふれる洋館、教会、原爆、そして遠く南の端の外国への窓……。今回の旅では、そうしたものとはまた別に、長崎を「歩く」ことによつて、長崎に住む「人」に出会えた、それは大きな発見だった。

ちゃんと発祥の店「四海樓」の裏手に、旧香港上海銀行長崎支店記念館がある。長崎にあるおよそ70の洋館のなかで、もつとも大きなものである。かつての神戸東亜ホテルを手掛けた建築家、下田菊太郎が設計、欧風式の建物に和風の屋根の「帝冠併合式」という情緒ある建物だ。区画整備から一時は取り壊しが決まつたものの、市民10万人の署名が集まり中止になつた。また、鎖国時代には唯一の外国への窓であつた出島は、資料館として街並みが復元されている。その復元費用10億円近くは、市民の募金によつて集まつたものであ

る。長崎は、自分の街の誇りを自分たちで守るうとする「人」の力が大きい。

「長崎ぶらぶら節」の主人公、芸と歌に人生をかけた芸者・愛八が生きた花街「丸山」を歩いた。その昔、多くの男性諸氏が「花街に行くか行くまいか」と思案したと「思案橋」跡を通り、「梅園身代わり天満宮」へと進む。元禄の時代、身代わりとなつて切られた天神を奉つたという天神には、戦争中、丸山町の出兵兵士らが皆この神社にお参りし、そのほとんどが無事に帰還したといふ。「長崎ぶらぶら節」の中でも、愛八が、肺病の子どものために神社でお百度を踏み、結果的に身代わりとなる。

「由緒ある寺ですが、維持管理がむずかしく廃れる一方でしたが、ぶらぶら節のおかげで参拝客も増えました。なかにし礼先生が身代わりになつて天神さまを救つてくれたのでは」と、長崎史談会会員で料亭「青柳」の若だんなである山口広助さん。そして、史跡料亭「花月」。日本で最初に作ら

れた洋間、坂本龍馬が酔つてつけたという刀傷の残る柱、シーボルトの妻・タキの部屋、原爆の爆風で曲がつた柱。「さまざまな時代を過ごした料亭です」と、女将は話す。長崎は、それぞれの時代の激動の波をかぶつてきた街だ。

印象的な言葉があつた。しつぽく料理で有名な「矢太楼」のおかつ「あま（大女将）」が言つた言葉だ。

「長崎の女性は働くことが好きなんです」

長崎くんち（長崎では「おくんち」という）では、長崎の男がその腕を見せる。いつたん引き下がつても、「もつてこい」という観客のかけ声とともに祝い船や龍船を引き回し、ふらふらになるまで帰してもらえないという。男は勇壮に、大らかに、女は纖細に、腰を据え、揺れる時代に生きてきた、それが長崎の「人」なのだろう。ぶらり、ぶうりと長崎を歩き、この地の人と接し、愛すべき日本の地がまたひとつ増えた。

（鳥羽）

●取材協力／長崎市観光部観光宣伝課

# 長崎 ぶらりぶらり 紀行

愛すべき人と街

日蘭交流400周年記念事業「ながさき阿蘭陀年」  
オランダ



ペイサイドにある「ながさき阿蘭陀年」のメイン会場。停泊しているのは唐船「飛帆（フェイファイ）」の復元。来年のNHK大河ドラマにも登場する



「ながさき阿蘭陀年」のガイドさん。日蘭交流400周年を記念し来年3月まで、長崎市内各地でさまざまなイベントが行われる



「梅園身代わり天满宮」で説明をしてくれた長崎史談会の山口さん。本殿の天井には奉納された書が並ぶ



↓「花月」の部屋からは有名な庭園が見渡せる。窓ガラスはうすく伸ばしたビードロだとか。右側には坂本龍馬がつけたという柱に書かれた「花月」での食事は前日までに予約の「花月」の女将は、老舗の料亭の貴婦と女性のあたかさを感じさせてくれた



花街からの帰り道、未練から振り返りつつこの下を通ったという「見返り柳」。左はカステラで有名な「福砂屋」本店

# MUSIC 伊藤君子&小曾根真 SPECIAL GROUP TOUR 2000

先日スイングジャーナル誌でゴールデンディスク賞を受賞、今や実力・人気ともにナンバー1のジャズ・ボーカリストと称される伊藤君子と、彼女のニュー・アルバム「KIMIKO」にも参加している神戸出身のジャズ・ピアニスト小曾根真のクリスマスコンサート。クリス・ミン・ドーキー(b.)、クラレンス・ペ恩(dr.)を迎、豪華で熱い夜を演出する。



伊藤君子&小曾根真

12/17(日) 17:30開場 18:30開演

神戸新聞松方ホール (ハーバーランド神戸文化情報ビル4F)  
前売一般5000円 当日5500円  
甲陽サウンズ、チケットぴあ、ローソンチケット他で発売中  
甲陽サウンズ ☎078-882-1574

# MUSIC 高木綾子フルートトリサイタル

チケットプレゼント

フルートによるユーミンの楽曲とクラシックのアルバムを同時リリースしてデビューした、話題の新星、高木綾子。'97年の神戸国際コンクールで奨励賞を受賞したとあって、神戸は彼女にとって思い入れもひとしおの地。「いい音楽はいい音楽」と、ポップス、クラシックのジャンルを超えた個性あふれる音色を聴かせる。



セクシーな唇からこぼれるのは  
独特的重厚な音色

1/14(日) 14:00開場 15:00開演

神戸新聞松方ホール (ハーバーランド神戸文化情報ビル4F)  
S席3800円 A席3300円 (当日+400円)  
チケットぴあ、他市内の主要プレイガイドで発売中  
神戸新聞松方ホール ☎078-362-7191

# PLAY 前田敏郎オリジナル朗読劇～POETIC SYMPHONY～ "Last Christmas Eve"

劇団青年座出身の前田敏郎が作・演出・出演するオリジナル朗読劇「POETIC SYMPHONY」は今回で3回となり、彼独自の世界を創るライフワークとなっている。恋人を失い、過去にとらわれ前に向くことを忘れた彼女に、神はどんな贈り物を与えてくれるのだろうか? 20世紀最後のクリスマスに、あなたの心に愛の灯がともされる…。



神戸出身の前田敏郎

12/21(木) 20:00開演 22(金) 17:00/20:00開演

23(土) 13:00/16:00/19:00開演  
パラディアーム (北野異人館俱楽部パートII2F)  
前売3000円 当日3200円  
チケット/ガンバ・インフォメーション ☎03-3477-8676

# ART DESIGN21

哲学する生活デザイン 60カ国260人の若手デザイナーの作品展

「ファッション」という世界共通の言語を介して文化的多様性を高め合い、地球市民としての意識を広げていこうというプロジェクト「DESIGHN21」。その過去3回の全入選作品を展示する。世界60カ国の若手デザイナーたちが、時代・国境を越えて、ひとりひとりの哲学を通して、次の世紀に求めるべき生活デザインを提案してきた作品群。



世界60カ国260人の若手デザイナー  
が生活デザインを提案

~1/23(火) 11:00~18:00 (金曜のみ~20:00)

水曜休 (12/27~1/4休館)  
神戸ファッション美術館 (六甲ライナー「アイランドセンター」駅下車すぐ)  
一般500円 小中高生・65歳以上250円 ☎078-858-0050

MODERN もだかる CULTURE 0012

7年振りのコンサートは、滝えり子がもっとも思い入れのある国際会館で、懐かしのスタンダードナンバーを、独特の深い歌声で聴かせる。「21世紀の幕開けの日曜の午後のひととき、ごゆっくりお楽しみ下さいませ」と、滝えり子自身も楽しみに待つ舞台である。田中克彦指揮、出演は北野タダオとアロージャズ・オーケストラ、ストリングス。

1/28(日)15:00開演

神戸国際会館こくさいホール(「三宮」駅南100m)  
前売5000円 当日5500円  
チケット/神戸アルバトロス ☎078-231-3300



40年以上現役で歌い続ける  
ジャズシンガー、滝えり子

★チキンショージ ☎078-392-0146

9(土) PONTA BOX、10(日) ROCK AROUND KOBE、12(火) LA-PPISCH、13(水) PUFFY、14(木) DIMENSION、15(金) BEAT CRUSADERS/BUMP OF CHICKEN、17(日) KOBE ROCKIN'BLUES NIGHT、18(月) POWER OF ROCK2000 FINAL、19(火) SONS OF BLUES、20(水) ~24(日) T-SQUARE、25(月) TimPan、26(火) スガシカオ、28(木) クニ河内とかれのともだちII、29(金) BARAKA、30(土) hot hip tramp online school

★ピアジュリアン ☎078-391-8081

8(金) 鈴木華重子(p)、10(日) 辻本恵子(p)、11(月) 小笠原薰(vn) 清水道代(p)、13(水) 寺内智子(sp) 袖野亜希子(p)、14(木) 近藤美香(p)、15(金) 西本淳(sax)

濱長良美(p)、18(月) 李浩麗(sp) 大迫めぐみ(p)、21(木) 近藤美香(p)、22(金) 鈴木華重子(p)、23(土) 寺内智子(sp) 袖野亜希子(p)、25(月) 小笠原薰(vn) 清水道代(p)、27(水) 原公一郎(g)、西本淳(sax) 鈴木恵美(sax) 濱長良美(p)

★Holly's ☎078-251-5147

8(金) 奥田尚子(vo) &メーブルシロップBAND、9(土) 長井美恵子(p) トリオ、14(木) 原田耕自(p) 森本良平(b) 後藤信夫(dr)、15(金) たなかりか(vo) 植田貴代(p)、16(土) 楠本なおこ(vo) 小泉ゆうこ(p) 奈良原裕一(b)、21(木) 萩田和貴男(g) トリオ、22(金) アロハサンタ ハワイアンナイト、23(土) EveRobin(尺八) RonMason(g) DaveBoyle(tb)、24(日) 橋本尚子(vo) 他、28(木) まさ木まや(vo) 米森英毅(p)、29(金) 山口エミ(vi)

★T2樂屋 ☎0798-242-5888

9(土) ブツツエンレスBand VS エミ&ヨシ、11(月) コウタロー-SuperSoul、12(火) 橋井勝巳、13(水) KAJA&JAMMING、16(土)

となりどおし、17(日) TheSoulShakers、18(月) アクワボムVSスカンクウォーター、19(火) ロメル・アマード、27(水) Jun with光太郎、29(金) 田中晴之/東ともみ/小林久人/島田和夫、31(日) カウントダウン

★イエローリボン ☎0798-34-2872

9(土) Fool's silver、10(日) Liverpool、15(金) 14周年記念ELVIS NIGHT、22(金) 45RPM、23(土) STAMPEDE X'masNIGHT、24(日) クリスマスダンスパーティー(HitParade9

★萬屋宗兵衛 ☎078-332-1963

8(金) UP SWING JAZZ ORCHESTRA/神戸大学軽音楽部、10(日) 黒田卓也(tp) 朱恵仁(p) 中林薰(b) 清水勇博(dr)、15(金) MAPLE LEAF SWING、17(日) FIVE SOUNDS、26(火) オノベツ

★WACA ☎078-333-6768

9(土) 45RPM、15(金) KAJA、16(土) 天野SHO、19(火) チャーリー・コーセイ、23(土) MASH、30(土) BLIND DATE(ロメル・アマード&島田和夫)

**TICKET**  
Pチケットプレゼント  
**RESENT**

&lt; MUS I C &gt;

★1/14「高木綾子フルートリサイタル」(神戸新聞松方ホール) ベア1組  
★1/23「滝えり子ニューイヤーコンサート」(こくさいホール) ベア5組

&lt; A R T &gt;

★神戸ファッショント美術館  
(ファッショニング) ベア3組

&lt; C I N E M A &gt;

★バルシネマしんこうえん  
(月末まで有効) 2名△12/6~13「アメリカンヒストリーX」「ザ・ハリケーン」  
△12/14~20「戦争のはらわた」「レザボア・ドッグス」△12/21~28「ロック、ストック&トゥー・スマーキング・バレルズ」「ブランケット&マクレーン」

★シネモザイク1~4  
(月末まで有効) 2名△1~12/15「悪いことしましょ」△12/16~「シック

ス・デイ」△2~12/16~「ホワット・ライズ・ビニーズ」△3~12/16~「ゴジラ2001」△4~12/9~「ダイナソー」

★ペレーネシネマ・カナートホール  
(月末まで有効) ベア5組△12/9~22  
「顔」△12/16~「ゴジラVSメガギラス」  
△12/23~1/12「学校VI」「シベリアの理髪師」△1/13~「天国までの100マイル」

★西灘劇場

(月末まで有効) ベア5組△12/2~15  
「オール・アバウト・マイ・マザー」「Born to be ワイルド」△12/16~29「あの子を探して」「バダック・砂漠の少年」  
△12/30~1/12「チューブ・ティルズ」「バップス」

●ハガキかFAXで①希望するチケット②氏名③郵便番号④住所⑤年齢⑥職業⑦電話番号⑧12月号でおもしろかった記事とその理由を明記して下記まで(12/28必着)。  
〒650-0011神戸市中央区下山手通2-13-3建創ビル4F  
(FAX078-331-2795) 月刊神戸っ子「もだかる0012」編集室

**MODE  
CULT'S  
VOICE**

○カニ解禁です紅葉ですと  
さわいでいたらもう12月。

クリスマスにバーゲンに、  
四季ある国は忙しいです  
な。10月号のご感想より。

●「有馬に広がる御所坊の

世界」近くで遠い有馬という感じがありました。あまりに近くでなかなか行くことがありませんでしたが、この企画は目からウロコ。たくさん楽しいところがあるんですね。北区・田中さん

●トアロードクラフトアートフェアに行きました。「神戸っ子」さんのブースを探したのですが…。お気に入りのアーティストを見つけましたので、来年も出品したら良いなと思っています。福引きで「千代」のデザート無料のチラシが当たり、細い裏道を上っていくと、普通(?)の一軒家でピックリ。でも美味だったです。長田区・内山さん

○神戸っ子で出店、考えたことなかったですね。似顔絵とか陶芸品とか、先生方に習って来年からやりましょうか(本は?)。





# 異端の薔薇

中谷 衣里

写真・後藤 洋治郎

夕方、岸子は新聞を取りにいく門までの道々、あの室田夫人の書いた地図が果たしてポストに入っているか、胸の動悸が高鳴るのを押さえることは難しいほど、興奮していた。

ポストにあった。

その地図は、室田夫人の几帳面な性格通りの、はつきりとわかりやすい地図と、

「岸子様、

御一緒できなくてごめんなさいね。相手の方には連絡しておきました。

あなたの事は、事細かく申し上げておきましたところ大変喜んでおいでになりました。何も御心配には及びません。とても温かい心の方で、広い心もおもちですから、どうぞ御安心くださいませ。

では、また、お手紙にて  
と記してあつた。

室田律子

あくる日は、晴れたさわやかな風が頬をやわらかくなれるよう、岸子の気分も優れ、ハンドルも軽やかにエンジンを吹かし、地図の家へと急いだ。

驚いた事に、家から山の方へ5分とかからず走った、横道に入った坂の上にあった。

車の窓から見上げると、まるで17世紀のフランスのお城のよう、聳えるように建っていた。

家からこんなに近くにこの家があることに、今まで少しも気付かなかつたことが不思議でさえあつた。

考えてみれば、坂の上の突き当たりまでは上がつてぐることはなく、知らなかつたことが当然のようであつた。時也を連れての散歩はこの坂の上までは無理で、建つてることさえ知らなかつたことに納得している可笑しな岸子だつた。

今日は義母が地唄舞いのお稽古日にあたり、時也と一緒に連れてきていた。

お手伝いの貞子も休みの日と重なり、時也を連れて来ざるを得なかつたことに、また日を変えて来た方がよかつたことに気付いた。

その時、門についたテレビカメラに車の窓から覗く岸子の姿が見えたかのように、大きな門の扉がジーと言葉静かな音とともに開いた。

岸子は一瞬怯んだように身構えた。

だが自然にゆるやかに車のペダルを踏んでいたのだった。

広い道が、また門から続き、玄関と思われる所まで車で5分ほど続いた。窓から見ると前庭と思われる所に老女といえれば失礼な、年を取られたご婦人とも表現できようか、女性が竹箒を持って庭を振り返つた。目が鋭く、岸子は慌てて黙じりりと車の方を振り返つた。

礼をする格好になつていた。

老婦人も慌てるよう腰をかがめているのに視線が合つた。

時也はよほど恐かったのか、窓からすぐに座席へ身を翻して、もんどうりうつようにお尻とともに座席に沈んだ。

「ママ、帰るんでしょう」と前の座席に顔を覗かせて囁いていた。

「いいえ、ママはこのお家に御用があるのよ。いい子にしていてね」

「いい子にしていて、お願ひよ。ご用はすぐにすみますからね」とエンジンを切ると同時に片手で時也の頭の髪に手を触れていた。

「僕、帰りたい」とエンジンを切ると同時に片手で時也の頭の髪に手を触れていた。

「いい子にしていて、お願ひよ。ご用はすぐにすみますからね」と言葉が強かつたのか、時也は叱られていたと勘違いしたようだつた。

「ねえ」とまた前と同じく強く言つて、岸子は車から降りた。

興奮ぎみの岸子に時也は黙つた。

小さな時也の手を引いて、岸子は車から降りた。

もうすでに老紳士が、扉を開けて待つていて。岸子は4段ぐらいの階段を思わず踏み外して、踵を浮かせぎみになる。

鼻の上に脂汗が出てるほど緊張しているのに気付いた。

紳士は穏かに黙礼した後、

「岸子様ですね。お待ち申し上げておりました」

「はい」と思わず時也の手を強く握つて、

驚いた時也が岸子を見上げた。岸子は作り笑いをして、時也を、いや自分自身に落ちつけと気合を入れてするのが解つた。

「どうぞ、こちらへ」

紳士は黒いタキシードを着て、まるでフランス映画の召使のように見えた。

「はい、恐れ入ります」

岸子自身も映画の女主人のように振舞っているのが、この雰囲気の中で生きているかのように、人形が糸に操られているようだった。

時也も母の異様な様子に呑み込まれたのか、岸子と同じ緊張をもつて母の手をしっかりと握り緊めていた。

エレベーターの前を抜けるとそこは、まるでお城の中のよう。天井は高く、聳えるように上から光る丸いシャンデリアの玉3個が、今にも落ちそうにぶら下がっていた。

何故かその時、岸子は先日、時也のウルトラマンのビデオ

を借りに行つた

店で、時也の選

ぶビデオの間

に、横の棚に並

んだマイケル・

ダグラスとキャ

サリン・ターナ

ー主演の「ローマ家の戦争」と

いう夫婦が殺し

合うシーンで、

シャンデリアに

ぶら下がる2人

が体重の重さに

引かれて、廻り

ながら落ちて行

くシーンを思ひ

出していた。

こんな場面では、極度の緊張を強いられる病を持つ人間は、その場から関係のないことを頭に描きながら、緊張を解いていくすべを何故か身に付け（自分を守る方法の一つとして）目を反らしながら、ゆるやかにその場から逃れるのが常だった。

通された部屋のテーブルの前に座ると同時に、黒い洋服に白いエプロンの中年の女性がお茶をもつて出てきた。

こんな世界がまだ日本の、それも岸子の住む家の近くにあるとは、夢のまた夢の話のようでもあった。時也は恐れと母の緊張した面持ちを感じたかのように、岸



子のお尻の後に身を縮めて丸くなつて、かくれんぼうをしているように顔を出して、今から何が始まるのか興味深げにきよるきよろとあたりを見回していた。

一時ほどして、今度はきつと背広を着た、前の老紳士より少し若い紳士が黙礼と同時に岸子の前に座った。

岸子は、次に何が起るのか不安に顔を曇らせていた。すると、今度は中年の小奇麗な婦人がやつてきたが、整いすぎた顔をしていて、好感の持てない冷たい表情に思えた。岸子の前に足を揃えて、別の紳士が立っていた。彼は自分の事を秘書の前中良と言つた。

前中の横に寄り添うように座った女性は、魅力的な味のある声をしており、顔の冷たさとは正対なのに少し驚いた。

その女性の声にうつとり聞き惚れていると、自分は野村由紀子という名の秘書だと告げた。

岸子は何という場所に迷い込んでしまつたのかと、思わず溜息を漏らした。すると由紀子という女性は、キッと岸子の顔を穴のあくほど見て、睨む表情に、岸子は思わず心震いするほど緊張が走つた。

由紀子はスースはエレウノの細身の物で、白いカッターシャツを着て、時計までが上品な高価なものだった。

思わず岸子は、前に座る由紀子に対してもいろいろ想像を巡らし、こんな時に不謹慎と思いつつ、この女性がお酒に酔つたときなど、もう諦めかけられた男性に、酔つた勢いで電話の力を借り、

「もう、すでに終わつた2人だけれども、また逢つてみせんこと。まだ、私はあなたのことを忘れることなど出来ないのですが、どうなの」

と電話口で囁いているのかしら、岸子はいつもの癖で空氣の張りつめたこんな時に頭の片隅で空想して、独り楽しんでいた。主人の拓也との間に繰り広げられた苦しい世界に、苦悩から少しでも早く逃れたいという気持ちの表われで、こういった癖が何時間にかついていた。

岸子がそんなことを想像していると、急に野村はわざとらしく、そして大きく、

「えーん」と咳払いを一つした。岸子は鳥肌が立つほどの寒さを体全に感じた。

その場の嫌な雰囲気を消すがごとく、前中は喋り始めた。

「こういった個性的な人間の集まりの中で、マドモアゼルは日々を送つておいでなのです」

そこまで喋ると、急に意味のない間合を置いた。

岸子は「マドモアゼル」という言葉に、このお屋敷の御主人は若い御婦人なのかと思った。「岸子様。ついていくる自信はおありでしよう」

響く声で、前中は諭すように言つた。

思わず反射的に、大きな声で、両手を膝に揃えて、

「はい」

と岸子は返事をしてしまつた。

それで良いのか、悪いのかさえ、今の岸子は判断力を完全に失つていた。

しばらく、2度目に紹介された妙子と呼ばれるエプロン姿の女性が丁寧過ぎるくらいで、前に座る2人にお茶を持って現われた。

これで役者は全て揃つた、と思うとほつとする間もなく、一番大切なことを忘れていたことに気付いた。それはこのお屋敷の主である「マドモアゼル」と呼ばれている女主人公が登場するはずである。

だが3人は、そのことには一切触れることなく、一向に女主人の登場場面は訪れなかつた。

妙子と呼ばれる女性は、エプロンの裾を握り、

「岸子様は何を飲まれるのでしよう」

冷ややかに尋ねた。

岸子は思わず、「お水……を」

その言葉に3人の目が異様に光つたように見えたのは、岸子の思い過こしたのだろうか。水が岸子の前に置かれた。

グラスは勿論、カラの重いグラスで、水が美しいコップの水に泳いでいるように見えた。

岸子にとっては、思いもかけない返事で、前中と由紀子は揃つた3人の内で、暗い沈黙は終わつた。

「では、今日はこれにて」

岸子にとっては、思いもかけない返事で、前中と由紀子は揃つた3人の内で、暗い沈黙は終わつた。

「えーん」と咳払いを一つした。岸子は鳥肌が立つほどの寒さを体全に感じた。

その場の嫌な雰囲気を消すがごとく、前中は喋り始めた。

立ち上がりつた岸子は、ほんのわずかな時間だったが、とても長い時をすごしたように、疲れがどつと出ているのに初め

それほどの緊張を強いられる時が流れたのだ。

ふと気付くと、息子の時也の姿が見えない。

その辺りを探したが見当たらない。遠くまで目

で追ってみたが、何處にも姿はない。きっと幼

子のこと、少しの時間にもじつと我慢できず厭

きたのだろう。岸子でさえも今までに経験した

ことのないこの雰囲気に、時也も退屈したのだ

ろう。

時也の姿の見えないことに、岸子は冷や汗を

覚えた。

立ち上がるとめまいを感じる岸子。

追い討ちをかけるように、由紀子は、再び座り直し、何か

早く口に喋り出していた。

岸子も再び座り直したが、頭の中は時也のことでのいっぱい

だった。

由紀子の口元をしっかりと見てはいたが、何を言っているのか、全くといつていいくほど理解していないのに、ただ頷いている岸子。

由紀子には変な癖があった。それは口元が動くと、口と同様に喋る度に、両肩が右・左と、上がったり下がったりする

のが、岸子には嫌にはつきりと記憶に残った。

思わず岸子は叫び声になっていた。

時也はやや落としてみたが、目は時也を睨みつけていた。

時也はやっと手を引つ込み、首だけ前に突き出して、可愛い仕草で見入っていた。しばらくそのままの格好で時を過ごし、時也がその場を離れようとした時、秘書の前中が笑顔でその様子を眺めているのに、何か暖かい空氣を岸子は感じた。

「失礼いたしました」

うやうやしく一礼する岸子に、前中は、「いや、子供の仕

草には、何かほつと心温まる思いがしますね」

その言葉に救われた。岸子は胸をなでおろした。

それでも、まだ、上氣した岸子は、玄関に立っている老紳士が前にいるにも気付かず、

「あの、お玄関はどちらでしようか」

尋ねてしまった。

前中は、なお笑顔を崩さず、笑いのこもつた言葉を返してきた。

「ああ、こちらですよ」

前中の指す手の方向に、老紳士が立つてい

ることにはじめて気付き、岸子は顔を赤らめた。

時也の手を引き歩み出すと、時也が急に立ち止まつた。このお屋敷の品格を子供ながらに感じ、魅入ら

れて夢中なのか、手を強く引き返してきたのだ。

岸子の家も拓也の実家と共に、高級住宅地に建てられ、あ

る程度の品の揃つた家だった。義父は高名な画家の絵画、骨董品を収集していたが、このお屋敷にあるそれぞのものは、

岸子が今までに見たものではない品が多く揃つている。

応接間には、本かテレビの、世界の美術品アワーで見たこ

とのあるものが多かつた。

それは億に近いよう高価なものばかりであると思われた。その億単位に近い高価な絵画が何枚も飾られ、テーブルの下に隠れるように敷かれている絨毯は、岸子にもわかるほど高価で繊細な模様のベルシャ絨毯で、思わずスリッパを履かねばならないとさえ思われた。

また、花々におおわれた花瓶は、ガレーの、これも値段の全くわからないものが何本も並び、何とも表現の出来ない光沢を放つていた。

最も驚かされたものは、玄関のガレージの横の上り口に、世界に十数個しかない、あの高名なロダンの作品の「考える人」がさり気なく置かれていたことだつた。

このような環境の中では、普通の人々は感心し、素晴らしきものが真近に見られることに幸せを感じるであろう。だが、岸子は違つた。

心の病のせいか、それらの感情の中にもつとも恐ろしいこの病の特長である、肩が凝るという表現ではまだまりのつかない、重い石がこれでもかと、どつかりと両肩に乗つていていた。

心が強めを感じていた。いやがる時也の手を無理に引っ張り、連れ去ろうとする岸子に、老紳士は冷ややかに微笑する。それとは反対に、何と

も言えない恥ずかしさと恐ろしさが思考する岸子に、もう一つ、それ以上に嫌な射るような目をした妙子がいた。

エプロンのポケットの上に両手を乗せ、睨みに近い目は、まるで悪魔の瞳によって見えた。

岸子の感情は、移り変わる気分の中で、何かゲームの中にいる主人公が岸子ではないかとさえ思われた。

岸子はまた、病のため要らぬ心配が始まり、さまざまに

するといい目の妙子の前を通りすぎ、エレベーターの前まで来た時、我に返る岸子。

はじめてそこで、時也の目を見ることができ、ほっとして、また脇の下を流れる一筋の汗を感じていた。

車を止めてある所に、時也の手を引き歩いた。途中に、長い首を持つて黒光りのするドーベルマンが6匹、激しく吠えていた。

お屋敷に足を入れた時には、犬の声も、時也も全て忘れていたことに岸子ははじめて気付いた。

6匹のドーベルマンの横に、まるでミイラのごとく細い目をして、薄気味悪く年を重ねた、背の異常に高い男が時也の顔の下に隠れるように敷かれている絨毯は、岸子にもわかるほど高価で繊細な模様のベルシャ絨毯で、思わずスリッパを履かねばならないとさえ思われた。

6匹のドーベルマンと同じく、男の肌は黒く光っていた。まるで7匹の犬が吠えているような錯覚さえ岸子は覚えた。

彼はお化け屋敷の人を驚かせる人形のようで、時也は怯えて、岸子の手を握りなおした。堅く熱を持つて。

6匹のドーベルマンとともに、男の肌は黒く光っていた。まるで7匹の犬が吠えているような錯覚さえ岸子は覚えた。

吼える6匹の犬、見据えた恐ろしい目の男。時也は車の所に来ても座席に座ることさえ出来ぬほど怯え、座席の下にもぐり込むように丸くなつて隠れて泣いた。

手が震え、なかなか車のキーが差し込めず、また、その手でキーを回す力がないほどに動揺する岸子。

やつと車が走り出すと同時に、岸子は時也の存在にあらためて気付く。

帰宅した岸子は、キッチンで心安まる香りのペーパーミントのハーブティーを飲んだ。それでも部屋が廻つて見えていた。

その時、電話のベルが奥で鳴っていたが、手に取ることさ



え出来なかつた。

そのベルの音がこれから岸子の身に起る变化のベルだと  
は、気づきもしない。そのまま時也の部屋で、時也の遊ぶ傍  
らで深い眠りに落ち込んでいく岸子。それは奈落の眠りとさ  
え思えた。

眠りの中で、奈落の棲み人、あの拓也の姿を見ていた。

岸子が見たこともない女性に会うのである。  
そしてその女性が、高笑いをして拓也と手をつないで歩い  
ているのだった。

岸子が、

「行かないで！」

と叫んでいた。二人は岸子を振り返り、笑い声を上げながら去つて行く。

はつと目を覚ました岸子は、寝汗をびしょりとかいている。それさえ気付かぬほど疲れ切っていた。  
このようなことは岸子にとって生まれて初めての経験だった。

今までには、何があるとすぐに医者に駆け込んでいた。時也が小さい怪我をして、医者が、

「これほどのことと、来ることはありません」

と言つたとしても、

「先生何故なのでしょう。こんなに大きな怪我をしていると  
いうのに」

と首を傾けるのだった。当事者の時也は、もうすでにけろりとしているのにである。

それから三日も経たずして、ある夜に、お手伝いの貞子が、

「若奥様、前中様という方からお電話です」

その声に震えあがる岸子。

「岸子様ですね」

電話口から聞こえる声は、確かにあの笑顔の前中の声である。  
用件は、マドモアゼルが明日にでもお会いしたいと申され  
ていることとござります」

岸子は、  
「少し時間を頂けませんでしようか。考えてみたいと思つて  
おりますので」  
「ええ、いつでも結構ですよ。お気が向かれました時でいい  
です。私前中まで連絡頂ければ幸いに存じます」

それだけであつさりと電話は切られた。

やはり、あの「マドモアゼル」が：室田夫人が言つてお

られた心の広いお方なのか、きっと「マドモアゼル」と呼ばれるには、若い女性なのだろう。どんなお方かと岸子は思考を巡らしてみた。

逢う心はあつたが、もう心とは裏腹に、すでに身体は次の行動に移つていた。

その夜のこと、睡眠誘導剤と安定期、そして咳薬など何種類もの薬を無意識に口の中に流しこみ、まるで酒に酔つたようにならで持つた身体をベッドに滑りこませ眠り込んでいた。

見たこともないマドモアゼルという女性の影を追い求めている自分が何時の間にかいた。

意識のかすかに向こうに、ぼんやりとではあるが、岸子の作り上げたマドモアゼルがいて、岸子はその幻影に独り善がりの想いに酔つていた。夢の中でのマドモアゼルは年老いた女なのか、中年の女、または若い女性なのか解らず夢の中ではまよう岸子がいた。

けだるい朝を迎えて、時也を幼稚園に送ると、廻りの御夫人達の誘いも早々に断り、足早に家路へと急いだ。  
早く前中に「連絡を」と思いつつ、思いとは反対に電話をかける勇気が持てない、消極的な岸子。

岸子は情けないと想いつつ、数日を過ごしている自分自身と向き合つていた。  
そうして無駄に時間を使つて、義父や父、そして貞子の留守を見計らいつつも、まだ決心がつかずいらだつ岸子。勇気をふりしぶり岸子は、朝も早くから念入りに肌の手入れをし、ドレッサーの前でどの洋服を着ようかと迷い、マドモアゼルに会う準備に取りかかった。

義母には、

「今日の予定は何かおありなの、岸子さん」と聞かれ、

「いいえ別に、お昼からお友達のところにちょっと顔を見に

行こうかと考へていますが。長い間ご無沙汰申し上げている  
のですから」

「そうなの。予定はそれだけ」

「はい。今のところは：体調が悪く、あまり外出もしてい  
なかつたので、ご心配の手紙をいただいておりますので」

「そうね。もう体重も戻ってきたことですし、女同士のお喋りもきっと気分転換になるでしょうね」

「ええ」

岸子はとっさに、ごく親しいお友達といったが、これから逢おうとしている影さえ、また想像もままならぬ女性に逢いに行くとは、義母の知る由もなく急に不安になつた。

「せいぜいおしゃれをして行くことですね」

「ええ、そうしたいと思つております」

「いいのよ、別に。あなたは何もせずっといいんです。今日一日、楽しい、明るい日をすごすか、それだけ考へていれば、心の病も知らぬうちに治つてしまうものなのよ」

「そんなに簡単にいくでしようか」

「それは時間はかかりますよ。でも心の傾きは、知らず知らず流れを変えるものと思ひますけどね……」

「そうですね。そう思い、楽しい時間を作る努力をいたします」

「そう、その考へで一日を送ればいいんじやないかしら」

「ありがとうございます。ほんとうに私の勝手ばかり申して、お食事も買ひ物も、お掃除までもお義母様と貞子さん押し付けてしまい、とても気になつてゐるのですが駄目ですね。私つて」

「あら、そんなことなくつてよ。人生つて思うほど短くも長くもないわ。こんな時間も神様が与えてくださつた時間だと感謝して、甘えられる時は甘えていいればいいのよ。私はそう思ひます」

「ほんとうにお義母様には心から感謝してます」

「何を言うの、もとほと言えば拓也のしでかしたことでしょ

う、何も知らないあなたをこれだけ傷つけた男の母親でしょ

う。これでももつと、甘えてほしいぐらいに思つていてますよ。

お父様も同じ気持ちでいらっしゃると思いますよ」

「ありがとうございます」

岸子は、最後の言葉を口にするときには、思わず涙ぐんで

（つづく）



中谷衣里（なかたにえり）

神戸市生まれ。神戸のトアロードと北野町に、サント・ノーレ（フランス料理と音楽の店）を永年営業する。阪神大震災に遭い、一時期声を失う。ベンネットムにて雑誌や新聞のコラム等に発表をしていたが、本格的に作家として執筆活動に入る。